

# 親にとっての子どもの価値と

## 子どもの教育

柏木 恵子

古来、「子どもは宝」といわれ、それを親たるもの誰も疑いません。そして子どものためにはできる限りのことをしてやりたい、それが私心ない親心、親の愛情だと思っています。しかし、本当にそうでしょうか？ このことについて、最近、考え直さねばならないように思います。

少子化がしきりに喧伝され、それは子どもの教育や発達上、問題だといわれています。



す。しかし、少子化はなにも今に始まったことではなく、かつてもあった——沢山子どもが産まれても病気で多数が死に、結局残ったのは二人という時代が東西どこでも長く続いていた、その意味で少子は決して初体験ではありません。それよりも重要なことは、産めば必ず育つようになったこと、そしてその結果、子どもを産むか否か、いつ、何人かを親が決めて産むことになったという変化です。「授かる」子どもから、「つくる」子どもへの変化で、これは親における子どもの価値の決定的な変化です。

このように、子どもの誕生——命が親の手のうちのものとなったことが、子どもを親のもちもの存在へと変化させたことは否めません。確かに親は子どものためにはできるだけのことをしてやりたいといい、実際、子どもの教育熱は高まるばかりです。子ども数の減少にもかかわらず、増大する育児／教育産業はその端的な例証です。しかし、その教育は、本当に子どものための教育になっているのでしょうか？

おむつもとれないうちから、水泳だ、英語だ、ピアノだヴァイオリンだと早教育はさかんです。少し大きくなれば、受験のための塾通いも珍しくありません。親は子どもによかれと思っ**て**しているのでしょうか。しかし、子ども自身がそれをどれほどしたい、ゆきたいと望んでいるかは大いに疑問です。子どもにはまだわからない、だから親が「よかれ」と思うことをさせてやる親心だというでしょう。しかし、子どもは特



別なおけいこよりも、身近なものや場所をあれこれ探検したり試行錯誤したい、自由に遊びたい。そうすることで思いがけない発見や自分で「やった!」という満足や自信を味わいます。そうした経験によって、子どもは育ちます。そうした自発性、探索の機会を封じてしまっているのではないのでしょうか。「つくった」子どもを、自分のもののように親の考えだけで子どもの世界と経験を限定し勝ち。それは「子どものため」といいながら、実は一種の自己愛の発露となっていないのでしょうか。

最近、「子育て」ということがしきりにいわれます。そこには子どもが育つことへの敬意が薄れ、親がなにかしてやるのが万能といった不遜な態度が窺えないでしょうか。子どもが親によって「つくる」時代に、陥り勝ちなこととして自戒しなければと思います。このような弊害をもつ親の教育の限界を、親だけによらずみんなの力で補完することが求められます。発達の主体である子どもが、幼少時から多くのおとな・子どものなかでみんなに守られ、社会のなかで育つことが必要です。その意味で、保育園や幼稚園の果たす役割は、今、大変重要だと思えます。

(白百合女子大学)

